ケンタウロスと私

タナカハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケンタウロスと私

【Nコード】

N0485X

【作者名】

タナカハナ

【あらすじ】

馬は良い。実に良い。それがサラブレッドだったりすると、もつと興奮する。そんな馬フェチである私、尾野^{おの}二十九日の前に現れた、半人半獣の郵便配達員、田中^{たなか}東馬^{とうま}。田舎ではまだまだ珍しい、このケンタウロス族のオスに、私は今日も振り回されるのだった。「ていうか、お前如きが馬を名乗るのすらおこがましいんだよ!」「僕の存在全否定!?!」 下品な表現が入ります 不定期更新です そんなに長くない予定

プロローグ

田中は私を優しく優しく抱きしめて、ささやく。

まるで聞き分けのない子供をあやすように。宥めるように。そして睦言のように。

「忘れていませんか、二十九日さん。僕は男じゃないですよ」「なにっ……言って……っ」

自分よりいくらか体温の高い逞しい胸に縋り付くようにして、私はしゃくり上げる。

一度崩壊した壁はそう易々と回復してはくれないらしい。

バカみたいだ、とぼんやりとした頭の隅ではそう理性が囁くのに、温もりを覚えた身体は言うことを聞いてくれない。

そんな私を甘やかすように、田中はますます腕の中にある身体を強く抱き込んでくる。

「僕は“オス”です。そこを忘れてもらっては困ります」「……バカっ……」

ふと緩んだ腕から少しだけ身を離し見上げれば、そこにはいつもの如く彫刻のように整った田中の笑顔。

けれど睨み付けたその先にあつた青氷の瞳の中に見つけたのは、消えることのない熱。

いつでもわたしを見つめ続けてきた、彼の。

「二十九日さん……」

掠れた低い声が名を呼んで、かすかに震えた私はゆっくりと目を閉じる。

遅れて重ねられた温もりと吐息にひどく安心を感じながら、甘く痺れる頭の中で、何でこんな事になっちゃったんだっけ、という不毛な疑問が渦巻いていた。

そう、あれは春。

この片田舎にひとりの郵便局員が配属されてきたのが始まりだった。

プロローグ（後書き）

不定期更新です。

連載の合間に思いつき更新になると思いますが、お時間がある時に楽しんで頂ければ嬉しいです。

お前を馬とは認めない

馬は良い。実に良い。

なんと言ってもあのバランスの取れた美しい身体。光る毛並み。風になびくたてがみ。

知性の光を湛えたつぶらな黒い瞳も、懐くと頭を擦りつけてくるような仕草も、全てが愛おしくてたまらない、私の愛する存在。だがしかし。

あくまで私、尾野二十九日おしほにじゅうくにちが愛しているのは馬であって、馬人間ではない。絶対にだ。

「二十九日にじゅうくにちさーん、二十九日にじゅうくにちさん、二十九日にじゅうくにちさんっ。今日はとてもいい天気ですよ！遠駆け日和だと思いませんか？僕ならいつでも準備オツケーですっ」

「黙れよ馬人間」

「ひどいっ！ひどいです、二十九日にじゅうくにちさんっ。何回言ったら直してくれるんですか。僕はあくまで半人半獣。馬人間ではありません！人間馬ですっ」

突っ込むところはそこでいいのか、田中。

「ていうか、お前如きが馬を名乗るのすらおこがましいんだよ」

「全否定！？僕の存在全否定ですか！！」

わざとらしく目の前で泣き崩れてみせるこの男 田中東馬たなかとうまの横

っ腹に、私は思いきり印鑑を投げつけ、当初の目的を強制的に思い出させる。

「とつとと受領印受け取って帰れ、郵便局員！」

「そんな乱暴さんな二十九日さんひじゅうめも素敵です！ あ、印鑑頂きます」

途端に真面目な顔つきに戻り、多少気持ち悪いことを呟きながらもてきばきと伝票にはんこを押していく。

そして玄関先に仁王立ちになってそれを見ていた私に、にっこりと笑顔を向けた。

「それでは、こちら荷物になります。これ、とっても重いんですよ。僕、親切な郵便配達員なんで運んであげますね。二十九日ひじゅうめさんの部屋まで」

「さらつと上がるつとするな。全国の親切な郵便配達員さんに謝れ！」

「二十九日ひじゅうめさんは結婚式までだめよ派なんです。そんな風に僕を焦らすなんて、二十九日ひじゅうめさん、意外とテクニシャン……」

「屠殺場へ行け。トラックは私が手配してやるから、今すぐに行け」
半眼で低く呟くと、田中はようやく玄関のドアを開けて頭を下げる。

「ふふふ、僕たちは半分馬ですが基本的人権を持った馬ですから。安心してください、ちゃんと戸籍もありますから、結婚して尾野から田中になれますよ！ それに僕、夫としてもすごく優良物件ですよ！ 真面目で！」

頬を染めてもじもじと主張する田中の姿に、最早切れかけていた何かが盛大な音を立てて爆発する。

「独身女性の部屋に上がり込もうと画策する男のどこが真面目だ！」
玄関に飾られていた木彫りの熊を投げつければ腹立つほど簡単にそれを受け止め、田中はそのむかつくくらい美しい顔にとろけるような笑みを浮かべる。

「嬉しいなあ。僕のこと『男』って意識してくれてるんですね！」

「だ、誰がっ」

「でも二十九日さん、間違ってますよ？」

ふ、と田中は肩で息をする私の耳元に唇を寄せる。

「俺は男じゃありません、『オス』です。ケンタウロス族生後23年、優良な雄馬ですよ」

わざとらしく吐息をかけられた耳を押さえて私が後ずさると、田中は満足そうになっこりと笑い、あっという間に駆けていった。くそう、無駄にいい走りしやがって。

取り残された私はぺたりと玄関先で座り込む。
そして手に戻された木彫りの熊に向かって、熱くなる頬を苦々しく思いながら呟いた。

「あんな馬、全然可愛くないっ……！」

そもそもケンタウロス族とはなんぞや、というのが、それを初めて見た片田舎の住人達の疑問だった。

それもそのはず、異種族どころか外国人すら見ないこの片田舎。いくら都会ではもう当たり前だといつても、いきなり配属されてきたこの半人半獣の青年を前に、地区の長老的存在が発した言葉は「う、馬並みじゃのう」だったという。

最初は違和感放ちまくりの田中だったが、その生来の人懐っこさとギリシヤ彫刻か！という美貌、そして仕事の速さからたちまち地区にとけ込んだ。

いや、とけ込んでしまうどころか、下は三つの幼女から上は九十のお婆さままで幅広い範囲の女性を虜にしまったのだ。

確かに見てくれは悪くはない。

燃えるように赤い髪は清潔に整えられ、それと反対に色素の薄い青色の瞳はいつでも柔らかく、どちらかと言えば柔和な印象を薄いフレームの眼鏡が引き締めて見せる。

彫りの深い日本人離れた美貌は眩しいくらいだし、制服に包まれた上半身は服の上から見ても引き締まっている。

そしてその下半身。

そこに存在するのは馬の身体。

それもこの馬フエチの私をして見とれずにはいられないほど美しい、栗毛のサラブレッド！

ああああ、上さえついていなければああああ！あの脳みそさえ乗っていなければああああ！！ ブラッシングしてええええええええええええ！

寝室に引いた布団の上で、私はあまりの悔しさにごろごろと転げ回った。

拳を枕に打ち付けて、乱れた息を整える。落ち着け、落ち着くん
だ二十九日。

起きあがって姿勢を正すと、私は今し方の自分のいけない妄想

中学生男子が河原で見つけた捨てエロ本に興奮してつい持ち帰っちゃったりするあの背徳感　を振り切り、枕元に置いておいた段ボールを手を取った。

こんな片田舎にも即日配送。うむ、パーフェクトだ、アマゾン。それがケンタウロス族の配送会社によって、ケンタウロス族の郵便配達員の手によってもたらされた物だとしても、この際関係ない。ベリベリと勢いよく箱を開封し、中から出てきた数冊の写真集に思わず頬ずり。

『サラブレッド列伝』 『サラブレッドの四季』 『日本の名馬100撰』 『サラブレッドの休日』

素敵すぎる。タイトルだけで鼻血が出そう。

これは中学生男子とエロ本の如く、私も興奮を抑えられない。

やべえええ、サラブレッドまじやべえええ。美しすぎる、エロ過ぎる!!!

この陽に輝く美しい毛並み、細くも引き締まった長い足、程良く筋肉の付いた胸、腿、尻！

たまらん。実にけしからん。

この家に誰かがいれば不審がられるくらい下品な声を上げつつ、私の幸福な夜はそうして過ぎていくのだった。

お前のその目はビー玉か？

三十歳の朝は早い。

地区の外れにひっそりと建つ、一人で暮らすには無駄に広い平屋。その家中の雨戸を開けて回るのが、私が起きて身支度をやる前にまですること。

それから顔を洗って髪を整え、一番茶と炊きあがったご飯を仏壇に供え手を合わせる。

じいちゃん、ばあちゃん、おはよう。

心の中でそう声を掛けると、写真の中のふたりと目を合わせる。私のことを最後まで心配し、愛してくれたふたりが残してくれたこの家が五年前に東京から戻ってきた私の今の居場所。

今日も元気に過ごすことを誓うと、私は朝食前に勝手口から外へと足を向けた。

自分の朝食よりも優先すること。それは、厩舎にする我が愛馬『アルカディア号』の世話である。

私が姿を見せると、昇り始めた朝日に照らされて美しい姿をした黒鹿毛のアルカディア号は、嬉しそうに私の肩に鼻先を擦りつけた。あああもおお可愛い！！

私も負けずに額に顔を擦りつけ、しばらく一頭と一人は朝の至福の時間に浸るのだった。

朝一番、一回目の餌やりを済ますと後ろ髪を引かれつつ家へ戻って自分のご飯。簡単にお茶漬けとインスタントみそ汁と緑茶。これが定番。

さっと片付けると再度アルカディア号の所へ。

水を用意した裏の空き地へと放してやると、アルカディア号は嬉しそうに駆けていく。その幸せそうな姿を見ながら、私は彼女の寝床を掃除したり餌を追加したりしていると、時間はもう午前中を半ば過ぎていたのだった。

全てが愛馬中心の生活。

それを幸福だと思いこそすれ、どこかへ遊びに行きたいだとか誰かとお茶でも飲みながらのんびりしたいだとか、そういうことは一切ない。あり得ない。

なので、この私とアルカディア号とのいちゃいちゃ時間を邪魔する奴は、マジで馬に蹴られてなんちゃらしてしまえばいい。

「二十九日さーん、二十九日さん、僕です！ 田中東馬が参りましたよー！」

ただし、相手が馬の場合は何に蹴っ飛ばしてもらえばいいのか、未だにわからないでいる。

「表に郵便受けを作ったんだが、その目はビー玉か！？」

「うふふ。あれって僕専用の郵便受けですよね！ 心配しなくても僕からの手紙は三通ほど入れておきましたから」

「持って帰れ、今すぐに！」

「大丈夫です、きちんと切手も貼って局を通してあります！」

「誰がそこを気にした！？ ねえ誰が！？」

もつやだこのケンタウロス。

「あ、これお届け物です。簡易書留なので判子をお願いします」

斜め上のやり取りにがつくりと肩を落とした私に、何度怒鳴られても懲りないこの馬男はにっこりと笑って郵便物を示す。最初から

言えよ、最初から。

私は仕方なく田中に表に回るように言うと、自分は勝手口から家の中へと入る。

くっそう、この後存分にアルカディア号といちゃついで、念入りにブラッシングしてやるうと思つていたのに！

ああもう早く済ませよう。誰だよ、簡易書留なんてわざわざ判子のあるような物送ってきやがったのはあ！

判子を持って玄関に行けば、おまえは三軒先の宮本さんちの柴犬か！と思つほどに尻尾を振つて待つ　決して比喩でなく　田中の姿。

「ほら、判子さっさと押して、さっさと帰れ」

「て・れ・や・さんっ」

このこのおつ、と前足を脇腹に擦りつけてくる田中の横っ腹に蹴りを入れる。

そうか、私がこの馬を蹴ればいいのか。なるほど。

「いたっ！　二十九日さんの愛が痛いっ！」

「その邪魔な尻尾を切つて筆にしてやるうか！」

「そんなに僕のこと……」

「そこ類染める所じゃないよ！　絶対に間違つてるよ！？」

落ち着け、二十九日。相手にすればするほど、こいつの思つ壺だ。

渡した判子で丁寧に受領印を押して確認している田中の身体が、

玄関からの光を浴びて滑らかに輝く。やばい。

小さな動きと共にぴくりと動く腿から尻にかけてのラインなんか、そこらの競走馬にも引けを取らない美しさ。

知らずに荒い息を繰り返す私に気付いた田中は、その端正な顔に艶やかな笑みを浮かべてゆっくりと私に身体を近付けてきた。

上さえ見なければつ、上さえ見なければ馬なのに……!!
騙されるな二十九日、これは田中だぞ! 田中なんだぞ!?
なけなしの理性が私に警告するが、私はどうしても奴の身体から
目が離せない。

「ねえ、二十九日さん」

局の制服に包まれた上半身を折り曲げ、田中は低く甘い声で私を
惑わす。

「触りたいんじゃないんですか? 僕の毛並み。とつても美しいで
しょう? いいですよ、ブラッシングしても……」

あなただけ特別に、と付け加えることも忘れないあたりが腹黒い。
わかっている。この悪魔の囁きに耳を傾けたが最後、次からは「
僕にあんなことしたくせに」とか「あの時は気持ちよかったです」
とか何とか言つて、既成事実にしよつとするに違いないんだこの馬
は。

ああ、そこまでわかつていてなぜきつぱり断れない、二十九日!
誘つように振られる尻尾につい手を伸ばしそうになった瞬間。
裏からアルカディア号の鋭い嘶きが響き渡り、私は危ういところ
で伸ばした手を引っ込めることに成功した。

あ、危ねえ。マジで魂売るところだった……。

「ちつ、あの年増が……」

ちよつと待て田中、アルカディア号は確かにちよつとお年を召し
ているが、おまえにそこまで言われる筋合いはないっ!

ということ、私はさくつと田中の手から書留を奪つと開いたま
まだった玄関の外へと奴を蹴り出す。

かーえーれーっ、かーえーれーっ。

「今回は邪魔が入りましたけど、僕は諦めませんからねっ」

何その捨て台詞。お前に次などあるわけがない！

後ろ足で器用にバックをしつつうつとりとした視線を送ってくる田中を、ため息と共に送り出す。最早怒る気力も惜しい。

「……何でそこまで私に執着するわけ？」

ぼつりと零れた私の言葉に田中は一瞬、驚いたようにその綺麗な氷色の瞳を見開いた。少しの間不思議な感情の揺れがその瞳に現れ、けれどすぐにそれは微笑みへと変わる。

いつも見せるものとは全く違う、どこか私の心を落ち着かせなくなるような、そんな笑み。

そして少し厚めの唇に指を当てて囁く。

「それはまだ秘密です」

切れ端とおはじき

午後十時の最後の餌やりを終え、ブラッシングでお互いの愛を確認した私はアルカディア号を休ませるためにしぶしぶと母屋へと引き上げた。

まあいい、昨日のグラビアホースたちと妄想の中で戯れるという上級者の楽しみが私を待っている。

ふふふと口元からマジに流れる涎を拭いつつ、風呂上がりのご褒美ビールを一本手にした私は、そこで今日届いた書留の存在を思い出した。

東京から田舎に引つ込んだ馬フェチの私に、書留なんて物を送ってくるのはうちの両親か仕事関係者だけだ。あえて言おう、友達などひとりも存在しないと。

また見合い写真とかだったら嫌だなあ、とか思いつつ素っ気ない茶封筒を開いてみれば、出てきたのは本社に頼んでいた資料の束だった。

まあ急ぐ物でもないし、今日は飲んじゃったし……と色々言い訳をしつつ、そのまま多少乱暴にダイニングテーブルに書類を放る。

すると、その勢いで書類の間から何かの紙がひらりと舞った。

小さな紙の切れ端。見覚えのある筆圧の強い文字。走り書きの言葉に息を、止める。

“どこにいる？ 会いたい”

過去の亡霊が甦ったように、その言葉が熱を持って身体の中に浸透してくる。

囁かれた耳に、少しだけ欲望に掠れる懐かしい声。

優しい言葉なんてひとつも口にしなかった癖に、別れを切り出すとすると必ずそれを遮った唇の感触。私から言葉を奪うようにいつも、与えられるのは全てを飲み込んでしまうようなそんな触れあいだ。

がつつと床に何かが落ちる音に幻は振り払われる。

まだ充分に中身が残っていたビールが床に広がり、裸足の足に冷たい感触が届いたところで、私はようやく手近の布巾を取ってそれを拭い始めた。

身体が、心がまだ、震える。

どんなに物理的に距離をとったとしても、悔しいほど私は未だ『彼』に囚われたままだと、あまりの滑稽さに笑いさえ覚える。

「バカみたい……」

ため息とともに零れた言葉に、切れ端がかさりと音を立てた。

ビールを拭いた布巾を洗う気力も無く、勿体ないけれどそのままゴミ箱に投げ捨てる、一瞬迷ってからその紙は元の茶封筒の中へと封印する。

見たくないけれど捨てられない。今の私の気持ちと同じように。

なんだか何もかもものやる気をなくし、駄目にした替わりのビールをもう一本空けるのも躊躇われて仕方なく自室へと足を向ける。

最早年頃の女性の部屋とも思えぬ万年床に思い切り寝転がり、もう一度軽くため息。

会社に友人もいなければ、私の今の住所を知っているのは直属の上司くらいだし、他部署で仕事上なら関わりのない『彼』においてそれと個人情報を開示したりはまさかしないだろう。

そう冷静に考えてみても、何だか胸に巣くったもやもやは一向に晴れてくれない。

一体私は何を望んでいる？

『彼』にばれずにこのままやり過ごし、お互いに忘れてしまつてと？　かもしれない。

それとも、なりふり構わず『彼』にここまで追いかけてきてほしい？

おまえが必要だと、そんな嘘をまた囁いて抱かれないわけ？
わからない。

考えれば考えるほどに泥沼にはまる思考に嫌気が差し、寝てしまおうかと枕元の電気スタンドに手を伸ばしたところで、そこに置いてあつた手紙の束に目がいった。

それは毎日届けられるあのケンタウロスからの手紙。

本気なのか、娯楽の少ない田舎での駆け引きのような遊びなのか。よくわからないまま受け取っている手紙は、彼が私に会いに来ない日にも、いつのまにか設置した郵便受けの中にごく自然に入っているのだつた。

まだ一度も開けたことのない、それ。田中はそれについては何も触れることはない。

白いシンプルな封筒に、私の名前。裏には律儀に自分の住所と名前が書かれていて、普段のストーカー並みの態度と真逆で、ちよつと笑えた。

今日の言葉通りに封筒の表にはきちんと切手が貼られ、ご丁寧に消印まで押されている。内勤の局員が彼の行動に対してどう思っているのか、聞きたいような聞きたくないような。

この際だから、と私はその手紙を一通、思い切つて開封してみることにした。

私の名前だけ延々と書かれていたり、日々の私の行動記録が逐一書かれていたりしたら、真面目に駐在さんを頼ろう　そう心に決めて、封を破る。

すると中から掌の上にこぼれ落ちてきたのは、ガラスのおはじき二つ。

透明に赤い色が混じつたものと、青色のと。スタンドの灯りだけ

の部屋で、まるで宝石か何かのようにきらきらと光を反射する。

驚いて封筒の中を覗き込むと、そこには小さなメモのような手紙がひとつ。

『河合さんちのミニちゃん提供です。女はきらきらしたものが好きなのよ！とのこと』

表書きと同じ綺麗な、けどどこか大らかな字でただそれだけが書いてある。

確か河合さんとのミニちゃんはまだ四歳だったと思うけど、まさか田中、恋愛相談とかしてるんじゃないだろうな……。すごくあり得るが。

興味を引かれてもうひとつ、封を開けてみる。まるでクリスマス前にもらう、アドベントカレンダーを開ける時のようにどこか躍る心。

今度掌に落ちてきたのは、すっかり乾いてしまった緑のクローバー。しかも四葉。

『配達の中で見つけました。素敵なのが二十九日さんに起こりますように』

開けば次から次へと小さなプレゼントが転がり落ちてくる。わずかずつ気持ちちが降り積もるように、押しつけない優しさで包み込まれるように。

『この地図でわかりますか？ この間見つけた絶景夕陽スポットです』

『携帯で撮ったからちょっと小さいですけど、この雲、馬の形に似ていると思うんです』

『美女撫子という花の種をもらったのでお裾分け。 花の名前を聞いた時、二十九日さんが浮かびました』

胸がひどく苦しい。

恋はいつでも身を抉るような、心を切り刻むようなものだったはずなのに……こんな美しい気持ちを私は知らない。私には返す術がない。

小さい頃、まだ小さかった私の手にすり寄ってきた子馬に抱いた、暖かな気持ちの裏の大きな恐怖感に似ている。頼りない命に抱いた、不安。それにあの子馬は。 一つの間にか冷え切っていた身体を抱き締め、私は軽く頭を振った。

これは違う。これは、あのメモを見て心が揺れていただけ。絶対に違う。

布団の上に散らばった物と手紙を手早くまとめ、近くにあった空の缶の中へとしまい込む。何もかもに蓋をして、今は、まだ。

スタンドの灯りを消して、何かから身を守るようにして布団に潜る。

眠る前に誰かの顔が浮かんだけれど、それが誰だったのかわかる前に私は眠りに落ちた。

「知っていますか、二十九日さん。ドライブスルーってケンタウロスでも可なんですよ？」

「お前は黙って北の大地でソリでも引いてる！」

「試される大地ですね、婚前旅行には最適ですよねっ。二十九日さ

ん、やっぱり時計台とか行きたいですか？ それとも羊ヶ丘で羊を食べながら羊を愛でるとか？ 僕、同族はちよつとあれなんですけど、羊だったら食べられますよ」

「色々ツツコミが追いつかないんだけど!？」

「すみません、僕としたことが少し急ぎすぎましたね。そうですね、まずは近くの温泉に日帰りくらいからスタートですよ！ 最近はケンタウロス旅客専用の部屋とかあるんですよ。あ、行き帰りは当然僕に乗って頂いて結構です！ 本来僕たちは鞍を付けられるなんて屈辱の極みなんです、二十九日は特別です！ なんなら付けずに乗って頂いても。僕、絶対に振り落としたりしませんから。ああ……二十九日さんのお尻、素敵な感触なんですよねぇ……」

「ばんえい競馬場に連絡してやるから、心おきなく北で試されていい」

「心配ありませんよ。二十九日さんのひとりくらい、僕は背に乗せていても第二障害を余裕で越えていきますから!」

「今、すごい自然に重りの四百八十キロと同じ扱いにされたらただど!？」

「新婚旅行は北海道で牧場巡りもいいですよねぇ……、可愛い子馬を見ながら僕たちの家族計画を話し合うなんて、幸せすぎて……」
「私産まないよ!？ 子馬なんて産まないよ!？」

今朝目が覚めて、何とも言えない重苦しい気持ちに悩まされた私がバカだった。

どんな顔して会ったらいいんだとか、手紙についてなんか言っただけがいろいろかた、餌を食べていたアルカディア号に心配をかけてしまったくらい考え込んだというのに、この馬は!

珍しい白いシンプルなシャツ姿で現れたかと思ったら、「僕、今日お休みなんです!」から始まった一連の言葉に、私は個人的に気まずいことも悩みの種である昨日のメモのことも忘れ、いつも通り

の会話を繰り広げてしまっていた。

悩んだ私がバカだった。そう結論づけてため息をつく、突然ぼん、と頭の上に暖かな掌の感触。

慌てて見上げると、そこにはひどく優しい瞳をした田中の笑顔。氷のように薄い青がじつと私を見つめ、何かを許すように細められた。色はまるで透き通るほどなのにその奥にあるものは深く、今の私の所からでは絶対に届かない。

いつもは豊かに変わる表情で気にならないその美貌が、ただひたすらに私の前にあった。

形の良い眉、男らしさを損なうことのない程度に長い睫毛、高すぎないすうつと通った鼻梁の線。その下の、笑うとどこか子供っぽく見える大きな口が今は黙って、少し乾いた唇がかすかに笑みの形に持ち上げられている。

理屈も何も抜きに、私はその切なさにも何も言えなくなってしまうた。

そつつと髪を梳く大きく温かな手が耳を掠め、私は彼から目を逸らし、再び俯いた。

彼は待っている。

何故なんてわからないけれど、ずっとずっと、私のことを待っているんだ。まだ、何も答えられない私を。

「……ドライブスルーは却下だけど、絶景の夕陽コースくらいは付き合ってもいい」

そこに踏み込んでいけない私はやっぱり手前で立ち止まる。

それは絶対に置いて行かれない事を知って駄々を捏ねる子供のようにずるいことなのに、田中はどうしようもないくらいに綺麗な笑顔で私に手を差し出した。

「ご案内しますー！」

今はまだ、この手の距離で。

昭夫じいと茂みと不安

どこかで誰かが歌っている。

遠い外国の言葉で、シンプルな旋律がゆらりゆらりと揺れるようにして響く。どこか甘い歌声。私はこの歌を　知っている？

思い出せそうでも思い出せない、そんな喉に引っかかった魚の小骨のような思いに、思わず唸って眉を寄せる。すると歌声は途切れ、代わりにするりと頭から肩までを暖かな体温が通り抜けた。優しく、優しく、何度も肩口までの髪を梳いていく指先。

それが耳元を掠め、何とも言えない感触に私はびくりと身体を揺らした。慌てたように離れる体温。

それを追いかけるように、目を開けた私の視線の先にあったのは馬の尻、だった。

「どわあっ」

まだ半分以上寝ぼけた私がびっくりして飛び退くと、今度は背中に何か硬いものがぶち当たる。そこはかとない温もり。

おい、待て待てちょっと待て。なんで腹に腕が回ってくるんだ！

「この尻の形は田中か。田中なんだな！？」

「僕のお尻の形までばっちり把握している、そんな二十九日さんが大好きです！」

「首に鼻を寄せるなっ！　それからどさくさに紛れて、腕で下乳を触るんじゃないっ！」

「今日は初めての下乳記念日ですね」

「私は今日、人生で初めて馬肉を食おうかと思ってる」

「僕はあなたにならいつ食べられてもいいですっ」

人を勝手にヤンデレ要員にするな。っていうかそもそもデレてない。

なぜか私を背後からぎゅうぎゅう抱き締めている田中が、下乳とお腹の越えてはならない微妙なラインをそわりと撫でる。そんな不穏な腕を思い切りつねり、私は素早く田中の腕から抜け出した。

しまった、お奨めスポットとやらで気を抜いていたら、うっかりうとうととしてしまっていたらしい。前日の寝不足がこんな危機的状況を生み出すとは……大失態だ。

心なしか体温の上がった頬を手で隠しつつ、ちらりと横目で田中を見れば、その美しい顔はだらしなく緩みきっていた。

休日だからか、無造作に降ろされた髪がゆるく波を打って額にかけ、田中をいつもと違う印象に見せている。まったく忌々しいほどに顔がいいな、こいつは。

「もう少し寝ていてもよかったのに……」

少し不満げに呟く田中の眼鏡の奥が、とろけるように甘い感情を燻らせる。赤い色の癖っ毛が風に揺れ、筋張った首筋を撫でて流れた。

そんな一連の流れに背中を駆け上がるような感情を覚え小さく震えると、すかさず田中がその身体をびったりと寄せてくる。男だからか、馬だからか、肩と腕に感じる体温は心地いい。だがしかし！私はその、さっきまで枕にしていた田中の横っ腹に、思い切り平手を叩きつけてやる。おっといい音。

「調教？ ついに調教プレイ!？」

「もうそろそろナルニア国とかに帰れよ、ケンタウロス」

「勿体ないですよ、あれ。角笛かき鳴らす王子なんかより、ヒロインはケンタウロスを選ぶべきでしたよ、絶対！ だって、僕らのほうがずっとセクシーでしょう?」

「下半分が馬なのが問題だったんだろうな。ついでに言うと、私は上半分が人間なのが気に入らないんだが、そろそろ理解してくれ」
「ふふふ、そんな照れちゃって！ さつき二十九日さん、僕のお腹で眠りながら、ものすごく優しい手つきで僕を撫で回すものだから、僕は覚悟をしましたよ」

「聞かないぞ。おまえが何を覚悟したのか、絶対に聞かないからな！」

ああああ、壮絶に不本意だ。嘘を付けとか全く言えない。だってこの手があの上質のベルベットのような手触りを覚えている。

呼吸とともに優しく揺れる暖かな身体と、短いけれどちっとも攻撃的じゃない毛並み。時折腕に触れた尾のこさばゆさ。回した手が掴んだ硬い尻。どんなに素晴らしいグラビアの馬からも味わえない。三次元の感触の数々。

ちくしょおおおお、舐めまわしてええええ！！

ぎらぎらと欲望に充ち満ちた目で田中を見れば、奴は何を思ったか深く頷き、身体を横倒しにして私を見つめ返してきた。その潤んだ瞳は何だ、田中。

「初めてが大自然って、ちょっと馬っぱくていいですね……」

「うわああああ！ 微妙に否定出来ない気持ちかむかつくうううう！！！」

私が自棄になって田中の背中を踏みつけていると、近くの草むららがさつと大きな音を立てて揺れた。通りかかったのは、運悪く地区の長老的存在である昭夫じい。取り繕う暇もなく、この惨状がじいの前に晒される。この場合、運が悪いと感じたのは私のみ。

私は田中を踏んだまま固まり、田中は嬉しそうに尻尾を揺らし、昭夫じいはいはやりと笑みを浮かべた。

「一二三ひんみの孫娘は積極的じゃのう！ 馬を押し倒すとはなかなか…」

昭夫じいのその言葉に、このじいをどこの山に埋めるか迷って沈黙した私の隙について起きあがった田中が叫ぶ。

「失礼ですよ、昭夫さん！」

どこか凜々しく、にやにや顔の昭夫じいを睨んだ田中の横顔に、私の心は不覚にも少しときめく。そして振り返った田中は力強く頷くと、まかせとけと言わんばかりに胸を張りつてその続きを口にした。

「だから何度言ったらわかるんですか、僕は馬じゃなくてケンタウロスですっ！ 僕を馬扱いしているのは二十九日さんだけなんですっ」

「そこか！？ 重要なのは本当にそこだけなのか！？」

「当然ですよ、二十九日さん。僕はあなたのケンタウロスなんですから！」

返せ。私のさっきの無駄なときめきを、今すぐに返せ。

がっくりとうなだれた私に近寄ってくると、昭夫じいはわかっているとでも言うように肩をぽんぽんと叩く。お、珍しく空気を読んだかと思っただが。

「ここじゃいくら何でも丸見えじゃ。ほら、そのしげみの奥、あそこなんかは穴場じゃぞ」

「田中、今すぐ真光寺の住職連れてこい」

「嫌です。あそこの住職、競馬で負けると僕に塩撒くんですよ！？」

助けてアルカディア号。この田舎にまともな人間なんかいないんだ。そうだ、そうに違いない。都会育ちの私が足を踏み入れてはならない魔境だったんだ。

「心配するでないぞ、一二三とこの。この地区には奇跡的に獣医がおる。立派な子馬を産むんじゃないぞ！」

「頼むからもう帰れ。どこまででも帰れ。仏のお迎えが必要だったら手伝うから」

「そうですね、昭夫さん。せっかく初めてのデートなんですよ？

気を利かせてくれないと、もう二度と本屋から『本気の新妻一発乱れ咲き！純生シリーズ』とかお届けしませんからね」

「そ、それは困るのう」

明らかにじじいが読むには良からぬ本のタイトルを爽やかに告げ、満面の笑みを浮かべた田中が前足で昭夫じいの背中を押す。

早く田中と二人つきりになりたいわけでも、昭夫じい推薦の茂みを使用したいわけでもないが、とにかくじいがいるとこの場がややこしくなることだけは、はっきりとわかっていたのでついでに私も背中を押す。

「あと、僕は奥さんとも仲良しですからね。僕たちのことおもしろ可笑しく噂になった日には、『趣味の園芸』だと思っていた本の真相が奥様にうつかりばれちゃうことも、無きにしも非ずですよ」

じじい、おまえは中学生か！という叫びは飲み込んで、私は意外な思いで田中の横顔を見上げていた。

こいつのことだから噂になれば、「噂万々歳！」「これで僕たち恋人認定ですね！」とか嬉々として言い出すのかと思っていたのに……。

そんな私の心を読んだかのように、こちらをちらっと見た田中の

薄い青色が、優しい笑みの形に細められた。

「若いもんが二人してか弱い老人いじめよって！ 今に見ておれ！ 近い内に婆さんの竹の子料理、死ぬほど味わわせてやるからの！」

よくわからない捨てぜりふを吐いて、昭夫じいが年齢の割に機敏な動きで家の方向へと走り去っていく。すごいぞ、九十歳。

しかし素直に「今度ご飯食べに来てね」って言えばいいものを。あのじいもうちの今は亡き一二三じいちゃんとい勝負の意地っぱり具合だ。

「まったく……せつかく二十九日さんとデートだったのに、もう夕方ですよ！」

「おかしいな。私は野良ケンタウロスの散歩をしてやっただけだ」

「いいんです、それでも。僕は幸せですから」

いつも通りの私の言葉にさらりとそんな言葉を返し、田中はそうと私の手を握った。

まるで壊れ物を扱うようなその触れ方に、なんだか怒る気にもなれずに私はただ少しその手に力を込める。

男の、手だった。私の手を包み込む、大きな掌。高い体温。紙を扱うことが多い所為なのか、指は少しだけかさついている。その指が、私の手の甲を優しく撫でた。

何だか、少しだけ泣きそうな気持ちになって眉を潜める。すると、握られた手が強く引かれて、私は田中の胸へと導かれた。

「ちよつと……！」

「お願い」

どこか苦しげに息を吐いて、頭の上から低い声がする。
小さいのに、拒否出来ない。

「お願いだから、少しだけ……」

握った手よりずっと、頬に触れた身体のほうが熱かった。硬い胸板に押しつけられて、少しだけ息苦しい。太陽の匂い、彼の匂い。緩く羽織られたシャツの隙間から触れる肌が、しっとりとした私の肌に触れ、どうしようもない気分させられる。どうして？

どうして、いつもそんなに優しくするの。

どうして、いつもそんなに苦しそうに私を見るの。

ふざけてばかりいるくせに、どうしてこんな時ばかり。

頭のとっぺんに唇を寄せ、田中は触れた時と同じようにそっつと私の体を離す。

「……夕陽、落ちてしまいましたね」

何事もなかったかのように笑って。だけど、その氷色の瞳だけが、未だ消えない熱を湛えてそこにあった。

その中に映る私は今、どんな顔をしているんだろう。

「夕陽なんて、いつだって見られる」

いつも通りの素直じゃない言葉に、田中は安堵したように微笑んだ。

肯定も、否定もせず、ただふんわりと笑う。どこか儂いような、そんな笑み。

「そうですね。……じゃあ今日は帰りましょうか」

アルカディアさんも待っていますしね、と続けられた言葉に頷いて、自然に差し出されたその手を取る。それはまるで私の為の場所のように。

無言で歩きながら、ふと私はこの男にこんな風に求められたのが初めてだったことに気が付いた。

口では何だかんだと言ってくるくせに、私に無理に求めることはしない田中は、指先が触れることさえひどく恐れる。

今、こうして隣にいる田中という男は、どこかに何かとても歪なものを感じさせる。私にはそれが不安でたまらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0485x/>

ケンタウロスと私

2011年10月7日12時29分発行